



Title	第27回ワークショップ西洋史・大阪 報告要旨 : 2023年6月24日大阪大学
Author(s)	
Citation	パブリック・ヒストリー. 2024, 21, p. 126-128
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95500
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

1. 西ドイツ軍における軍人像

——1950～70 年代の軍内論争と軍隊改革——

福永耕人（大阪大学大学院 / 日本学術振興会特別研究員（DC））

西ドイツ軍（ドイツ連邦軍）は、ナチ期以前とは異なる軍隊として 1950 年代に創設されたが、軍事を嫌悪する国民と、「服従」などの旧来の軍隊的価値観を重んじる古参軍人たちの双方から拒絶された。この際、軍の新たな方向性の唱道者であった軍人バウディッシンは、前者にはそれまでとは異なる軍の革新性を、後者には現代戦における自律的な新しい兵士像の重要性を説いて、両者の説得を図った。

60 年代後半になると、内外の情勢変化に伴い、連邦軍の内部で今後の方向性をめぐって論争が交わされた。中將を最後に退役したバウディッシンに支援された一方の陣営は、軍の自由主義的な改革を求め、かたやシュネツ中將を中心としたもう一方の保守的なグループは、規律や自己犠牲などの伝統的徳目を復活させるべきだと主張した。両者の見解は対照的だったが、新しい時代に即した軍隊改革が急務であるという認識では共通していた。

社会民主党政権下、国防大臣の H・シュミットらは、政府内では保守派の主張は「あまりにナイーブ」と評していたが、公式には「議論に値する」などとコメントして、彼らを退けることはしなかった。その背景としてシュミットには、理念としては共感できるにせよ、しばしば過度に理想主義的になるバウディッシンらの主張だけでなく、保守派軍人らの抱く現実的な危機意識にも一定の理解を示すことで、両者の均衡を図り、連邦軍改革を進めたいという思惑があったことを指摘した。

2. アッシリア帝国における“王（家）の護衛”

伊藤早苗（名古屋大学）

前 1 千年紀前半に西アジアのほぼ全域を支配したアッシリア帝国における *(ša-)qurbūti* は、その原語であるアッカド語の意味“(he) of the closeness; (he) who is close”を汲んで、伝統的に“royal bodyguard”と訳されてきた。しかしながら近年の研究は「代理人、仲介者」という訳が適していると指摘している。そこで本発表では、アッシリア王碑文や首都ニネヴェの王室文書庫出土の実務文書で言及される *(ša-)qurbūti* を検討した。その結果、王だけでなく皇太子や皇太后の *(ša-)qurbūti* も存在し、彼らのアッシリア宮廷における地位は女王や宦官と並ぶほどの高位で、同時代に複数の *(ša-)qurbūti* が存在するものの *(ša-)qurbūti* の長官や副官といった称号は言及されず、軍事的人员や装備を持ち実際に戦争へ参加し、地方行政州で起きた諸問題を解決するため王や皇太子からの書簡や命令を携えて地方へ派遣され、移動の際には幹線道路である「王の

道」や道路沿いの宿駅・宿駅の装備を利用して迅速に目的地に到達することが可能で、地方においては行政州の総督より指揮命令権が高いことが明らかになった。そこで (*ša-qurbūti*)には「軍事的性格を持つ王（家）の代理人」という訳がより適していると結論付けた。

3. 古代エジプト末期王朝時代以降のソカル祭における「反セト神」的要素 ——Urk. VI 第二書の分析から——

宮本彩芽（広島大学大学院）

古代エジプトの砂漠と暴力の神セトは、紀元前 13–11 世紀には国家神に準じる地位として崇拝されていた。しかし、エジプトが外国人による支配を受けるようになった紀元前 7 世紀以降は邪悪な側面にのみ焦点が当てられるようになり、図像や名前の削除または別の神への置換、セト神中傷・憎悪の文書の作成という形で公的な場から排除されるようになっていった。その一例が第 30 王朝末期に作成された P. British Museum EA 10252 とプトレマイオス朝初期に作成されたと推定されている P. Louvre N3129 の両者に共通して見られる 2 つのセト神迫害の儀式（第一書・第二書）であり、これらを抜粋して収録したものが文書資料集 Urk. VI (*Urkunden des ägyptischen Altertums, 6. Abt.*) である。Urk. VI はセト神研究において重要な資料であるはずだが、これまであまり顧みられてこなかった。本報告では、第二書のタイトルで指定されている儀式実行日のうち、もっとも研究の蓄積があるソカル祭に注目し、第二書のテキストとプトレマイオス朝末期に建立されたデンデラのオシリス礼拝堂に残されているソカル祭に関するテキストを比較した。そして第二書の「セト神の解体」の場面はソカル祭の「セト神の動物の解体」と同じ場面であることを指摘し、ソカル祭において敵の消滅を執拗に祈願する「反セト神」的要素を含む儀式が行われていたと結論付けた。

4. 海軍強制徴募からみるイギリス大西洋帝国

——1740 年代ボストンにおける諸アクターの交渉を中心に——

高橋毅（福岡雙葉学園）

名誉革命以降（1688～）、イギリスはプロテスタントの盟主として、カトリックの大国スペインやフランスとグローバルな帝国戦争（植民地獲得競争）を展開した。従来研究では、七年戦争終結後（1763）には北米からフランス植民地を一掃し、大西洋帝国を完成させたとされる。

最近の英米圏の研究では、帝国の形成過程である七年戦争以前に、海軍のリクルート手段であった強制徴募が、本国を越えて北米・西インド諸島植民地へ多大な影響力を持ったとされる。私掠船や商船と比べ、低賃金などで船乗りから不人気だった海軍にとって、強制徴募は帝国の商業と軍事を支えるマンパワーを確保する「必要悪」だったのである。

しかし先行研究において、七年戦争開始直前の 1740 年代の評価は必ずしも定まっていない。また、1740 年代前後に行われた帝国戦争において、英仏戦争（1744–48）に対する英西戦争

(1739-43)における徴募運用の実態に関する研究が不足している。

そこで本報告では、当時北米植民地でも最大級の港町であり、尚且つノヴァスコシア・西インド諸島といった帝国の係争地の間に位置し、海軍にとって絶好の補給地であったボストンに着目した。そして英西戦争期から英仏戦争期にかけての強制徴募をめぐる諸アクターの交渉の過程を諸史料から再検討し、イギリス大西洋帝国にとっての1740年代を考察した。

徴募の交渉過程からは、植民地総督による海軍への協力だけでなく、ボストン住民たちも徴募に反抗しつつ、よそものや下層民の徴募を看過していた事実が看守された。よって1740年代は、ボストンが帝国戦争に巻き込まれる中で「財政“海軍”国家のブローカー」となる時代であったと主張した。

5. 1940年代スイスにおける「ソーシャル・ツーリズム」構想

——戦後への展望——

森本慶太（関西大学）

第二次世界大戦後、西ヨーロッパ諸国で構想された「ソーシャル・ツーリズム」は、休暇制度の整備、低廉な観光施設や割引手段の提供といった事業を通じて、余暇の普及や観光の大衆化を促進する役割を果たした。この事業は、1950年代半ば以降日本でも推進され、国民宿舎や国民休暇村の整備などの形で具体化している。

本報告では、第二次世界大戦中にスイスの観光業界関係者が構想したソーシャル・ツーリズムの特徴について、戦後西ヨーロッパの余暇の組織化との連続性を展望しつつ検討した。スイスの観光業は、二つの世界大戦の時代に国際観光の危機という大きな試練を経験するなかで、大衆化をはじめとする業界の構造転換をみすえた新たな振興策を実行しつつあった。第二次世界大戦勃発後も、中立国スイスでは、業界団体スイス観光連盟を中心に、戦後の観光像をめぐる模索が進められていた。そこでの論点の一つが観光の社会的普及であり、他国の事例を参照しつつ、「スイス型」のソーシャル・ツーリズムを形成していくのである。本報告ではこうした事実に着目し、ソーシャル・ツーリズムの代表的事例の一つとして知られる、スイス旅行公庫協同組合の戦時中の活動を明らかにしたうえで、その設立と運営を主導したスイス観光連盟関係者によるソーシャル・ツーリズム構想を検討し、戦後初期のソーシャル・ツーリズムの国際的普及にいたる連続性を展望した。